

〔資料紹介〕

丸山眞男と創立期の成蹊大学

亀 嶋 庸 一

以下は、『成蹊学園史料館年報2019年度』（2020年2月）に寄稿した拙著「〈始まり〉としての成蹊大学」を執筆する際に収集した学園史料館所蔵の成蹊大学開設期関連資料に記載されている丸山眞男に関する記録の一覧とその解説である。

一 資料一覧

1947年

1-a 「昭和22年度（旧制成蹊高校）教務日誌 昭和22年4月16日より
6月16日まで」

5月3日土曜日 行事 特別講義

新憲法実施記念講演会 高等科 午前10時 丸山眞男氏

1-b 「同 昭和22年11月1日より23年2月13日まで」

11月7日金曜日

丸山眞男氏 明治に於ける近代思想（自由主義）の発展

11月7日（金）、11日（火）、14日（金）

1948年

2-a 「成蹊大学設置認可申請書」（文部大臣森戸辰男宛 昭和23年7月
31日付）

第9 教員組織 3 学長（総長）並びに学部及び学科別担当教員
予定

丸山眞男と創立期の成蹊大学

教授 兼任 東京大学法学部助教授 政治学史演習 毎週授業担当 4 (時間) 東京帝国大学法学部政治学科 (卒) 法学士 著書 5 論文 0 教職適格審査判定年月日 昭和 21.10.4 採用予定年月 24.4 月額基本給 3,686 本籍長野 性別男 丸山眞男 生年月日大正 3.3.22

2-b 「成蹊大学設置認可申請書抄」

丸山の記載内容は 2-a と同様。

(これとは別に 2-a の「成蹊大学設置認可申請書抄」もあるが、丸山に関する記述は同じである。ただし、2-a およびその「抄」と 2-b とでは申請の時期及び内容が異なる。すなわち、前の 2 つは 7 月末日に提出され、設置学部は政治経済学部と工学部の 2 学部で「学長 (総長)」は「未定」であった。2-b は、11 月 19 日 (日付は学園史料館所蔵の「成蹊大学開設経過大要」による) に補足提出されたもので、文部省の視察後の指摘を受けて工学部を断念し政治経済学部のみを設置申請に変更して、さらに「学長」の欄に高柳賢三の名前を記載している。この再申請を受けて、翌年 2 月 21 日に成蹊大学の設置が認可された。)

3 「成蹊大学設置認可申請書正誤並びに変更」(「成蹊大学設置認可申請書追加書類」所収)

丸山眞男 著書 5 論文 0 を著書 0 論文 5 に改める。

1949 年

4 「大学設置認可報告会招待状原稿」(昭和 24 年 3 月 5 日付)

開催日 3 月 11 日正午 会場 成蹊学園図書館会議室
当日参会者芳名 丸山眞男先生
(他に蠟山政道、東畑精一、木村健康、辻清明など 18 名)

5 「大学設置準備外部招聘者謝礼予算」(昭和 24 年 3 月)

丸山眞男 職名兼教 今年 34 金額 5,000 開講年度 25
備考 毎週授業時数 4 政治学演習 東大助教授 3 月 10 日

6 「成蹊大学紹介週間日程」

昭和24年4月22日(金)9:00~11:00 講堂
「初めて社会学を学ぶ人のために」 東大助教授 丸山眞男氏

7 「成蹊大学紹介週間職員出勤一覧」

昭和24年4月22日(金)9:30~11:00 講堂
社会学 丸山助教授 司会 猪木

8 「成蹊大学要覧」昭和24年度

学科目及教授者大要
専門科目 選択学科 政治学史 講師 丸山眞男

9 「成蹊大学昭和24年度時間割表」

火曜 11:00 社会科学入門 丸山
(タイトルのない時間割表もあり記載内容は開始時間10:30を除いて同様)

10 「(政治経済学部) 教授会記録 No.1 昭24(1949)年4月—昭25年6月まで」

4月27日 2 時間割訂正の件 丸山教授の社会科学入門休講

1950年

11 「成蹊大学要覧」昭和25年度

事務及び学科目担当者
専門科目 必修 理論政治学 東京大学助教授 成蹊大学講師
丸山眞男

昭和26年度開講予定

政治学史 東京大学助教授 成蹊大学講師 丸山眞男

12 「成蹊大学一覧(昭和25年度)」

事務及び学科目担当者
専門科目 必修 理論政治学 東京大学助教授 成蹊大学講師
丸山眞男

昭和26年度開講予定

丸山眞男と創立期の成蹊大学

政治学史 東京大学助教授 成蹊大学講師 丸山眞男
成蹊大学学科担当者名簿（昭和 25 年度）
丸山眞男（まるやま まさお）講師 東京都目黒区宮前町 64

13 「昭和 25 年度政治経済学部時間表」

専門科目 金 4 3:00 131（教室）理論政治学 丸山
土 2 10:30 311（教室）理論政治学 丸山

14 「園報」第 9 号 昭和 25 年 4 月 25 日

人事 新任 4 月 1 日 大学講師（理論政治学）丸山眞男
講師（専門科目）外兼講師 丸山眞男 理論政治学 時数 特 2

1951 年

15 「(政治経済学部) 教授会記録 昭和 25 年度 No.4 昭和 26 年 1 月
—3 月」

第 23 回教授会 1951.1.10

6 (b) 「理論政治学」の取り扱い

丸山講師が昨年の暮れから病気であるので、その補講を村瀬助教授に委嘱する。

16 「園報」第 16 号 昭和 26 年 1 月 22 日

「理論政治学」代講

丸山眞男講師病気のため、「理論政治学」代講を 1 月 12 日から村瀬助教授が代講されることになった。

17 「成蹊大学一覧（昭和 26 年度）」

事務及び学科目担当者

専門科目 選択必修 政治学概論 東京大学教授 成蹊大学講師 丸山眞男

成蹊大学職員名簿（昭和 26 年度）

丸山眞男（まるやま まさお）講師 東京都目黒区宮前町 64

1952 年

18 「成蹊大学一覧（昭和 27 年度）」

成蹊大学職員名簿（昭和 27 年度）

丸山眞男（まるやま まさお）講師 東京都目黒区宮前町 64
（以後、昭和 29 年度まで名簿に名前の記載があり、住所は昭和
28 年度より武蔵野市吉祥寺 319 となっている。）

1955 年

19 「成蹊大学一覧（昭和 30 年度）」

旧職員名簿（昭和 30 年度）

丸山眞男（理論政治学）武蔵野市吉祥寺 319

20 「園報」第 55 号 昭和 30 年 4 月 30 日

人事 解嘱 嘱託 3 月 31 日解嘱 大学講師 丸山眞男

1979 年

21 『成蹊法学』第 14 号、1979 年 4 月

学会消息 研究会 1979 年 3 月 15 日（木）

講師 丸山眞男（ママ）氏（東京大学名誉教授）

「学問の歩みをふりかえって」 出席 29 名

二 解説

1 経緯および背景

丸山眞男（1914-1996）が成蹊大学創設期に講義等の担当依頼を受けた経緯および丸山と成蹊を結ぶ人脈的背景としては、猪木正道（1914-2012）、木村健康（1909-1973）、蠟山政道（1895-1980）の 3 人と成蹊学園との関係が考えられる。成蹊大学は戦後 1949 年に新制大学として誕生した。そこに至るまでの詳しい経緯については『成蹊学園史料館年報 2010 年度』所収の杉山和雄「旧制私立高等学校の転換過程—大学誕生の比較史」および北川浩「成蹊大学開設の経緯」を参照されたい。そこで明らかにされているように、上記の 3 人は成蹊大学政治経済学部の設置に際して大きな役割を果たしていたのであるが、ここで重要なことはその彼らがいずれも丸山と深いつながりを持っていたということである。

猪木は、「丸山眞男君と私」の中で次のように述べている。「敗戦後、私は旧制成蹊高等学校で教えることになった。丸山君の「超国家主義の心理と論理（ママ）」を雑誌『世界』で読み、すっかり感心してしまった。成蹊大学を創設する仕事に関与した際、私は丸山眞男君にぜひ出講して頂きたいと思い、丸山君を紹介なしに訪問した」¹猪木はその後同年輩の丸山を何度も訪ね弟子入りを決意したとある。実際、資料番号7（以下、番号のみ表記）にあるように、猪木は成蹊大学紹介週間で丸山が講演した際に司会役を務めていた。また、猪木が丸山に会いに行った理由として挙げられている丸山の論文が『世界』の1946年5月号に掲載されていることから見ると、1-a,bにある1947年の旧制成蹊高校での講演を丸山に依頼したのも同氏であったに違いない。さらに、9,10にあるように、成蹊大学開設初年度に、実現こそしなかったものの、当初の予定になかったはずの1年生向けの授業「社会科学入門」に急遽丸山を引っ張り出そうとしたのもやはり猪木ではなかったかと考えられる。²その後、猪木は1949年4月より政治経済学部教授となったが、同年9月に京都大学に移っている。

猪木は東京帝国大学経済学部出身で河合栄治郎（1891-1944）の門下であるが、木村健康も同じく河合門下で猪木の先輩であった。その木村は戦後成蹊学園の理事に父母代表の1人として就任していたこともあり、当時旧制成蹊高校の教員として大学設置に関わっていた猪木の推薦を受け成蹊学園の大学設置委員会の副委員長となった。木村は、軍部からの圧力を受けて文部省から著作の発禁処分を受けた河合への休職処分（いわゆる平賀肅学³）に反発して東大を辞していたが、戦後すぐに復帰した。丸山との関係でいえば、同じように平賀肅学に抗議して東大を辞職した後衆議院議員となっていたため戦後GHQから公職追放処分を受けた蠟山政道の処分解除に、木村は丸山らとともに尽力していたし、戦後丸山とは何度か対談もしている仲であった。その後、木村は東大定年後の1969年に新設もない成蹊大学経済学部の学部長に就任している。

東大法学部で丸山の先輩である蠟山政道もまた成蹊大学の設置検討に深く関わった学外協力メンバーの一人であったが、そうなった経緯としては木村や猪木の働きかけが考えられる。前掲の杉山、北川両氏の論考で述べられているところによれば、当初成蹊は蠟山を政治経済学部の学部長として、さらには成蹊大学の学長として招くことを検討していた。後述するように、当時教職不適格処分を受けていたためそれはいずれも「幻」に終

わったが、狭い専門に偏ることなく豊かな教養を育むという政治経済学部の基本構想は蠟山の考えによるところが大きかった。

以上の 3 人に加えて、蠟山の東大での後任者となり彼の追放処分解除の嘆願に丸山、木村とともに名を連ね、丸山同様創設期の成蹊大学で講義を担当した辻清明や、さらには丸山の指導教授で、成蹊学園の創設者である中村春二とも親交のあった南原繁の存在も丸山と成蹊とのつながりを考える上では無視できない。

2 成蹊大学での講義担当

8 の 1949 年度「成蹊大学要覧」（以下、「要覧」）では、「政治学史」が丸山の担当となっているが、「成蹊大学時間割表 昭和 24 年度」（24.7.15）には同講義の記載がなく、「成蹊大学学科担当者名簿（昭和 24 年度）」（24.10.20）にも丸山の名前の記載はない。2-a,b の「設置認可申請書」等には採用年度が昭和 24 年 4 月と書かれてはいたが、5 の「大学設置準備外部招聘者謝礼予算」（昭和 24 年 3 月）では丸山の開講年度は 25 に変更されている。⁴他方で、すでに述べたように、9 の「成蹊大学昭和 24 年度時間割表」（日付なし）には 1 年次向け科目「社会科学入門」を丸山が担当するとなっているが、10 の同年 4 月 27 日付「教授会記録」には同講義休講との記載がある通りである。

11 の 1950 年度「要覧」および 12 の同年度「成蹊大学一覧」（以下、「一覧」）には、専門必修科目「理論政治学」が丸山の担当となっている。講義は通年 4 単位で週 2 回行われ、13 の「昭和 25 年度政治経済学部時間表」によれば、同講義は金曜日 4 限（3：00～）と土曜日 2 限（10：30～）に開講されている。また、名前が明記されていないので資料一覧には記載していないが、「昭和 25 年度前期試験時間表 25.10.2 教務部」には 10 月 13 日（金）と 14 日（土）に「理論政治学は（平常通り）授業を行う」との記載があり、その熱心な授業ぶりが伺える。しかし、丸山の講義は 15 の 1951 年 1 月 10 日付の第 23 回政治経済学部教授会の記録および 16 の同年 1 月 22 日付「園報」第 16 号に記述されているように、最後まで完結はしなかった。実際、丸山は 1950 年の暮れから結核を患い、翌年の 1 月から 9 月まで中野療養所に入院している。⁵丸山の講義を代講した「村瀬」は、1950 年 10 月に成蹊大学に専任助教授として着任した村瀬興雄（ドイツ現代史、ナチズム研究）のことである。

17の1951年度「一覧」には、専門選択必修の「政治学概論」を丸山が担当するとの記載がある。11および12にあるように、前年度の「要覧」や「一覧」中の「次年度開講予定」では「政治学史」と記されていたが変更されたということになる。しかし、いずれにせよ、1951年度の東大での講義はすべて代講となっており、当然成蹊でも丸山は担当できなかった。実際、「昭和26年度時間割」には月曜日3限と木曜日2限に「政概」（政治学概論）の記載があるが、その担当者は「石上」となっている。石上は河合門下で1949年4月に成蹊大学教授として着任した石上良平（社会思想史、イギリス政治思想研究）のことであり、同氏はこれ以降政治学概論と社会思想史を担当した。⁶

1952年度以降は、「一覧」の科目担当者名に丸山の記載はなく、「成蹊大学職員名簿」に名前と住所の記載があるのみで、最終的には20の1955年4月30日付「園報」第55号にある通り、同年3月31日付で「解嘱」となっている。

3 幻の「理論政治学」をめぐる

したがって、丸山が成蹊大学で実際に講義を開講したのは結局1950年度の「理論政治学」のみであったということになる。しかし、このような講義名の授業を担当していたという事実は、この時期の丸山の問題関心に即してみるならばきわめて興味深い。実際、この年に発表された丸山の「三たび平和について」に関して、松沢弘陽は以下のように指摘している。「丸山は、すでに日本の政治学を「科学としての政治学」「現実科学」として蘇生させるために、「理論政治学」の創造と日本の現実政治の解明に踏み込んでいた・・・」。⁷周知のように、丸山は「科学としての政治学」（1947年）において、戦前における日本の政治学の「貧困さと立ち遅れ」を容赦なく指摘するとともに、政治的現実についての分析と科学的見通しを提示できるような「現実科学」として政治学を再建していくことの必要性を強く訴えていた。この文脈でみるならば、「理論政治学」という名称の講義は、いかにも当時の丸山の問題意識と呼応しているかのようにみえる。だが、丸山が東大や他の大学で行った講義や講演で「理論政治学」というタイトルを使用した例は見つかっていない。また、論文等を見ても、実際に丸山が「理論政治学」という用語を使用した例はきわめて少なく、時期的にもズレがある。⁸

そもそも、8や9にあるように、前年の1949年度に丸山に予定されていた担当科目は「政治学史」あるいは「社会科学入門」であったし、同年度の「要覧」には「理論政治学」という科目自体記載されてもいなかった。なぜ、次年度に「理論政治学」が開講され、しかもその担当が丸山に回ってきたのであろうか。じつは、2-a,bの「成蹊大学設置認可申請書」等の専門科目担当者リストには「理論政治学」の欄があるが、その担当者として挙げられていたのは蠟山政道であった。すでに述べたように、蠟山は1947年12月に公職追放の該当者に指定されたが、木村、丸山らの努力もあってか再審査の結果早くも翌年5月には処分解除となっている。⁹恐らく、蠟山に成蹊への学部長もしくは学長就任の打診が行われたのはその頃であったろう。しかし、同年7月末に提出された「成蹊大学設置認可申請書」(2-a)中の蠟山の「教職適格審査判定」の項目は、「別途審査中」と書かれていた。同申請書における学長の欄が「未定」となっていたのは、そのためである。この頃、文部省にこの件を問い合わせに行った猪木は、戦前の「東亜共同体」をめぐる言動を理由に文部省が蠟山を教職不適格処分とすることを担当者から聞かされている。¹⁰このため、11月に再提出された「設置認可申請書抄」(2-b)の蠟山の教職適格審査欄には依然として「審査中」と記されたままであったが、学長欄には急遽就任依頼を受けた高柳賢三の名が入られることとなった。このような経緯の下で、結局蠟山は成蹊に着任することができなかつたのである。その後、開設2年目を迎えようとしていた成蹊大学は専門必修科目「理論政治学」の開講を迫られていたが、蠟山の不適格処分は未だに解除されなかつた。¹¹丸山に担当が回ってきたのは、このような事情によるものであった。

当初の予定にはなかつたとはいえ、すでに成蹊で非常勤を勤めることが決まっており、しかも「科学としての政治学」を標榜していた丸山がこのような名称の科目を担当するのは、結果的にみれば、きわめて自然な、というよりもむしろ文字通り余人をもってしては代え難い人選であったといえる。しかし、成蹊大学で「理論政治学」という、政治学ではあまり馴染みのない名称の科目が、しかも必修科目として置かれていたのは一体なぜであろうか。丸山の発案によるものでないとすれば、それはいかなる経緯によるものであったのだろうか。先に述べたように、蠟山は木村健康とともに成蹊大学の設置検討に深く関わり、大学の基本方針はもとより科目編成にも蠟山の意向は大きな影響力を持っていた。¹²成蹊学園が大学設置委

員会を設置して正式に検討を開始したのは1948年2月13日であるが、木村が副委員長に就任した同委員会には蠟山も学外協力者の1人として関わっていたとされている。この時期の委員会の記録が残っていないので詳細は不明であるが、恐らく科目編成の大枠はこの委員会で検討され、その検討にもとづいて同年7月末までに最初の「設置認可申請書」が作成されたはずである。そこには蠟山の担当科目として「理論政治学」が書かれていたのであるが（蠟山の担当科目は2つあり、他の1つは「国際政治学演習」であった）、この科目名の由来を考える上で注目すべきことは、同申請書には木村の担当予定科目名が「理論経済学」となっていたことである。木村が実際にこの科目を担当することはなかったが、いずれにせよ、ここからは政治経済学部で政治系コア科目の「理論政治学」が経済系コア科目の「理論経済学」といわばペアの形で置かれていたことが読み取れるであろう。

そのような形のカリキュラムがつくられるにいたった理由は、もともと大学設置の検討を始めた当初は経済学部をつくる方向で考えていたからであろう。その後、経済学部での設置申請に必要な専任教員の確保が困難とされ、政治経済学部の設置に軌道修正された。したがって、恐らく先ず木村主導の下に経済学分野では一般的な科目名称である「理論経済学」が置かれることが決まり、政治経済学部への方針転換後はそれを踏襲する形で「理論政治学」という名称の科目が置かれるにいたったのではないかと推測される。そして、政治経済学部の設置に方針が決まってから、蠟山の存在はいっそう大きなものとなっていく。大学の設置認可が下りるとの見込みがついた段階で、1949年1月13日に大学開設に関する懇談会が成蹊学園で開催された。すでに学長就任が予定されていた高柳も出席していたが、議論の主導権を握っていたのはもっぱら蠟山であった。席上、蠟山は木村原案を踏まえ大学の基本方針として、戦前の旧制大学における教育や研究のあり方を批判して、人格主義と、非ドイツ的・非哲学マルクス的でエコノメトリクスなど英米風の近代的学問の重要性を、そして実証的学風の中での学問と社会との密接な連携の必要性などを提唱している。さらに、この懇談会を受けて直ちに大学開設評議員会が設置され、その下に置かれた学科編成研究小委員会のメンバーの筆頭に蠟山の名前が入れられていた。¹³このように、蠟山は自分が直接専任として関わるができなくなったにもかかわらず、設置準備の最終段階においても熱意をもって政治

経済学部構想に取り組んでいたのである。

しかも、蠟山のこのような意気込みは、戦後日本の政治学に対しても向けられていたのであり、したがってまた、それはまさにここでの「理論政治学」をめぐる考察とも関わってこざるをえないものであった。なぜならば、政治学者としての蠟山の当時の問題意識が他ならぬ丸山の問題意識と深く交錯していたという微妙な事実注目するならば、丸山の「理論政治学」担当にまつわる、きわめて興味深い一面が見えてくるからである。この時期の蠟山の著書である『日本における近代政治学の発達』（実業之日本社、1949年）の「序」の冒頭で、彼は次のように述べている。「終戦後に政治学の再建が論ぜられ特にその後進性が問題とされたとき、それについて聊か感ずるところを述べてみようと思ったのが、そもそも本書執筆の動機であった」。よく知られているように、同書は戦前の政治学を痛烈に批判した丸山の「科学としての政治学」を受けて執筆されたものであり、先の冒頭部分からも明らかなように、そこには丸山のいわば「精算主義的批判」に対する、戦前を代表する政治学者としての弁明的反論という意図が強く込められていた。¹⁴それは、日本政治学会が翌年この問題をめぐる共同討議の場を設定し、その司会役に丸山を当てていたことからみてもわかるように、戦後の揺籃期の日本政治学に一つの波紋を投げかけることとなったのである。¹⁵蠟山が、最後の最後まで自ら設置に関わった成蹊大学で「理論政治学」という新しい政治学の科目担当を引き受けようとしたのは、そして丸山がその講義を受け持ったのは、まさにそのような時であった。このようにみるならば、もともと蠟山の担当が予定されていた講義を奇しくも丸山が代わって担当することとなったというのは、たんなるめぐりあわせであったというよりも、むしろ宿命的ですらあったということにもなるであろう。

その丸山の講義も結局は完結しなかった。しかし、逆にいえば、それは彼が病魔に襲われる直前のぎりぎりのタイミングでかろうじて、いわば奇跡的に成立したのである。しかも、丸山休講直後の1951年1月24日に開催された第24回政治経済学部教授会で学則改正案が審議され、その結果「理論政治学」の代わりに、より一般的な科目名の「政治学概論」が置かれることになり、「理論政治学」の講義はわずか一年で終わりを告げた。こうして、「理論政治学」は、丸山や蠟山にとってばかりではなく、成蹊大学にとっても、あるいはあえていうならば戦後政治学にとっても、つか

の間の〈活動〉^{アクション}として消えることとなった。丸山の講義の内容は、当時の他の講義や講演から類推するほかないのであるが¹⁶、いずれにせよ、この「幻」の授業の講義録が成蹊にも東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターにも残っていないのは誠に残念である。

注

- 1 『丸山眞男座談』（以下、『座談』）第1冊（岩波書店、1998年）の「月報」1頁。
- 2 ちょうどこの時に出版された『社会科学入門』（みすず書房、1949年）には、丸山の「政治学」（後に「政治学入門」に改題）と猪木の「社会科学とマルクス主義」が収録されている。また、『座談』第1冊にみられるように当時猪木は丸山と何度か対談もしている。同書には丸山と木村の対談も収録されている。丸山と猪木の関係については、丸山も「そのころ猪木君と仲がよかった」（松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本丸山眞男回顧談』（以下、『回顧談』）（下）、岩波書店、2016年、45頁）と述べているが、その後講和条約や冷戦責任論をめぐる意見の違いから疎遠となる（前掲「月報」2頁を参照）。猪木と成蹊学園との関わりについては、猪木『私の二十世紀』（世界思想社、2000年）を参照。この時期の猪木のロシア革命研究については、以下の紹介がある。富田武「名著再読 猪木正道著『ロシア革命史 社会思想史的研究』 白日書房、1948年」（『成蹊法学』第81号、2014年12月、所収）。
- 3 平賀爾学および当時の時代状況の詳細については、立花隆『天皇と東大』Ⅳ（文藝春秋、2013年）を参照。また、平賀譲については以下の研究がある。畑野勇『近代日本の軍産学複合体』創文社、2005年。丸山の河合評については、『回顧談』（上）を参照。そこでは、学部時代に聴講した河合のドイツ社会民主党史に関する特別講義や二・二六事件への河合の勇氣ある発言に深く感銘を受けたことなど多くのことが語られている。
- 4 ちなみに、丸山への外部招聘者謝礼金が5,000円、講師月額基本給が3,868円とあるが、昭和24年度の国家公務員初任給は4,223円であった。
- 5 『回顧談』（下）所収の「略年譜」を参照。
- 6 石上は丸山、猪木とともに前掲『社会科学入門』の共同執筆者として「社会思想史」の章を担当している。石上の教え子で後に成蹊大学の教員となる川口浩との共訳に、グレアム・ウォーラス『政治における人間性』（創文社、1958年）がある。石上と同じく政治経済学部の設置と同時に新たに着任した教員に佐藤功がいたが、彼は丸山と一緒に政治学科を卒業した後法律系の助手となっており、成蹊では憲法を担当した。『回顧談』（上）、216頁を参照。
- 7 『丸山眞男集』（以下、『集』）第5巻（東京大学出版会、1995年）、358頁。松沢によれば、この1950年は6月に朝鮮戦争が勃発した日本においてもレッドパージが始まるなど、「政治化の時代」、「恐怖の時代」が進行しつつあったが、他ならぬ丸山自身、同僚の川島武宜から川島、辻とともにGHQによるレッドパージの

- 対象となっていることを知らされていた（同、350頁）。丸山が成蹊大学で講義を担当していたのは、まさにそのような時であった。
- 8 理論政治学という言葉の使用例としては、1957年執筆の「現代政治の思想と行動第2部追記」（『集』第7巻、31頁）や1964年執筆の「ウェーバー生誕100年記念シンポジウム報告草案」（『丸山眞男集 別集』第3巻、33頁）などがあり、どちらの場合も、「理論政治学」は「政治思想史」との対比で用いられている。そこでの丸山の意図が、2つの分野の恣意的な混同はもとより、機械的な分離にあったわけでもないことはいうまでもない。
 - 9 『追想の蠟山政道』（蠟山政道追想集刊行会、1982年）所収の年譜を参照。
 - 10 『私の二十世紀』183-4頁。
 - 11 蠟山は、公職追放解除後に教職不適格処分のまま戦後創立された日本政治学会の理事および日本行政学会の理事長に就任している。蠟山が教職不適格者の指定を解除されたのは、ようやく1951年10月になってからであり、その後1954年にお茶の水女子大学の学長に就任している。
 - 12 当時の関係者の証言としては、『追想の蠟山政道』所収の猪木および関島久雄元政治経済学部・経済学部長の追想文を参照。同書には丸山も寄稿している。丸山には、他にも「故蠟山政道会員追悼の辞」（『集』第11巻、所収）がある。
 - 13 学園史料館所蔵の大学開設関連資料「成蹊大学開設経過大要」、「成蹊大学設置委員会要録」および「学科編成懇談会」を参照。
 - 14 丸山に対する蠟山の反論を彼の戦前からの著作に遡って検討したものととして、三谷太郎「日本の政治学のアイデンティティを求めて」（『成蹊法学』第49号、1999年3月、後に『学問は現実に関わるか』東京大学出版会、2013年、に収録）を参照。また、蠟山の戦前と戦後におけるそれぞれの思想変容過程に共通するパターンと思想全体に通底する傾向性を克明に描いたものとしては、松沢『日本社会主義の思想』（筑摩書房、1973年）がある。さらに、松沢は同書で、蠟山と河合との比較や、河合門下、とりわけ猪木についても興味深い分析を加えている。もともとは主に思想の科学研究会の「共同研究 転向」の一環として1960年代初頭に書かれたものであるが、今日においても、否、今日においてこそ改めて読まれるべき研究である。
 - 15 「共同研究 日本における政治学の過去と将来」（『日本政治学会年報政治学』第1巻、岩波書店、1950年、所収）。参加者は司会の丸山の他、蠟山、辻、岡義武、中村哲、堀豊彦であった。彼らの多くは、主に丸山の企画による講座『近代国家論』に分担執筆者として参加しており、蠟山のものとしては『国際社会における国家主権』（弘文堂、1950年）がある。丸山自身は長期療養のため執筆できなかったが、丸山によるものと推定される「刊行の言葉」（1950年）が『回顧談』（下）に参考資料として収録されている。
 - 16 時期的に近く内容的にも関連のありそうな丸山の講義、講演の公刊資料としては以下のものがある。「旧制第一高等学校における政治学講義草稿」（『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第6号、2011年3月、所収）、「現代における

丸山眞男と創立期の成蹊大学

政治学の課題 1.2」(同、第 4 号・第 5 号合併号、2010 年 3 月、所収)。後者は早稲田大学での講演であり、これらの講義および講演は、いずれも「科学としての政治学」と同じ 1947 年に行われている。また、注 15 の「刊行の言葉」も、この時期の丸山の「政治学構想」を伺う上で重要であろう。

付記：資料の調査および収集については、成蹊学園史料館のスタッフの方々に大変お世話になった。また、解説の作成に際しては山辺春彦東京女子大学講師および宮村治雄元成蹊大学教授からそれぞれ貴重なご教示をいただいている。記して深く感謝申し上げたい。なお本稿執筆中に、大学設置経過について書かれた論考から本稿が多大な恩恵を受けた杉山和雄名誉教授の訃報に接した。心よりご冥福をお祈りする次第である。